HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近代ドイツの作家連盟(2)：考察の理論的背景について
Author(s)	前原, 真吾; MAEHARA, Shingo
Citation	独語独文学科研究年報, 24, 39-55
Issue Date	1998-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26071
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_P39-55.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

近代ドイツの作家連盟（2）　考察の理論的背景について

前原　真吾

■ 1．基本的な問題について

昨年度の拙論『近代ドイツの作家連盟(1)』においては、作家の職業団体およびそれに関わると思われる社会領域について、ある程度の具体的な様相を把握することを目指して、その歴史的状況の描写を行なってみた。また「作家連盟の成立」という社会現象そのものについても、試験的にではあるが若干の分析を加えてみた。これによって、少なくとも現象の輪郭を捉えるくらいのことはできたはずだと思っている。しかし、これは裏を返せば「おぼろげな輪郭」しか見えなかったということでもある。もちろん現在のところまだ（文学だけに限らずとも）研究者の手があまり入っていない分野であるから、僅か十数ページで語り尽くして終われるわけがないのは最初から分かっていたことであるし、また前回の最後にも述べたとおり、個別に扱っていかなくてはならない未だ手つかずの諸問題についても、すでにその存在が明らかとなっている。よって本来ならば、そのような前回には示しきれなかった部分を補いつつ、また視野を拡大する方向で新たな史料の提示およびその分析へと作業を進めていくのが、おそらく今回とるべきもっとも妥当な方法のはずであった。ところがこの一年の間に、そういった作業を進める以前の段階において問題とせねばならないような事態、研究活動の前提そのものを問われる事態に直面しているということが、次第に明らかとなってきた。すなわち「どのような立場をとると、作家の職業団体などというものを、ことさら文学研究の領域で扱う必然性が生じるというのか？」(*1)という問いに対して、より明確な解答を提示せねばならない状況にあることが分かってきたのである。

この質問の形態は一見したところ実に単純であるが、しかし答えるのは容易なことではない。というのも、ここでは「考察の視点・観点」と「そもそもの研究の動機」という二つのことが同時に問われているからである。明確化するために現在の問題を定式化すると、それは次のようになるであろう：

1) どのような理論的立場をとっているのか、抽象的なレベルでどのように考察や分析を行なっているのかということについて、それが可能である部分については明らかにしておく必要があるのではないか？（観点）
2) ドイツ文学の研究という分野にあって、こういった「異質」な研究対象に関心を向ける理由について説明する必要があるのではないか？（動機）

このような研究の前提に関わる問題にとって間違いなく重要であると思われるのは、何が、あるいはどんな側面が観察の対象として選択可能であるのかは、主としてその時々の学術的な認識の体系に依存して決められるということであり、さらにその可能な選択肢のうちからどのようなものが好んで取り上げられるかは、また文化的・社会的な状況によって左右されるということであろう。よって本論では常時これらの点に留意しつつ、まずこの二つの問題に対する解答の提示を試みようと思う。さらにその後に、作家連盟の研究が今後進ん

でいくはずの方向について、若干の展望を示そうと思う。これによって「研究の必然性を示す」という義務を一応は果たすことができるであろう(*1a)。

■ 2．研究対象は何か

「作家の職業団体」の考察において主たる関心を向けられている対象は、従来の文学の研究対象とは非常に異なったものである。それは、これまでテクストや作品という概念で包括されてきたものではなく、また批評や読者の機能でもない。書く・読むといった行為でも、特定の作家や詩人の生涯・思想・世界観といったことでもない。それは「作家」である。もちろん、普遍的・非歴史的なカテゴリーとしてこれを捉えようというのではない。目ざすところは、ある特定の社会関係の内部において「作家」がどのような存在であったのかを探り出すこと、比喩的な言葉で表現するならば、観察する時代と社会をある特定の範囲に限定したうえで、「作家」という共通項をもった人間からなる集合の特性について何らかの形での定式化を試みる、ということである。この範囲の取り方次第で観察方法も変わってくるのだが、特定の範囲とは、ここではもちろん十九世紀後半、特に1870年以降のドイツのことである（これ以後、本論において「作家」と表記した場合は、常にドイツ語の»Schriftsteller«(*2)を想定している）。このような研究対象の規定の仕方が、従来の文学研究におけるそれと比べて奇異な印象を与えるであろうことは否定できない。しかしながらこれは、「作家」という研究対象を明確に規定すること自体が、一方ではそもそも考察のために必要な前提条件でありながら、また他方ではここで究明すべき最終的な問題でもある、という複雑な状況に帰因している。そしてこの状況は、実際のところ観察者による問題設定の仕方から生じたものではなく、対象そのものから、つまり「作家」が自身を作家と認識し同定する仕方の特異性から生じたものなのである。したがって、この自己認識の方法と基準とを歴史的な（つまりここでは十九世紀後半ドイツの場合という）観点から特定することが、この考察の主要の課題であるということもできるであろう。

■ 3．社会史研究の動向

さて、このようなテーマが学究的関心を呼び起こすのはなぜかというと、それは最近のドイツにおける文学と歴史の研究に関連した、二つの学術的な理由からである。

まず一つめの理由は、このテーマがドイツにおける「経験的文学研究」および「文学の社会史研究」の学術的な動向をきわめて強く意識したものだということである。1970年前後のドイツの学生紛争による混乱の後にいくつかの大学において生じた、社会科学的な手法を取り入れて「文学研究の新たな学術化」を目指すという傾向を背景として、これらの研究活動はその対象領域を拡げつつ、80年代から現在にいたるまで革新的な成果を挙げてきた。基本的にそれらの文学研究には、書籍文化の歴史、読者・読書の社会史、検閲や書店・出版(社)史、貸本屋や図書館の社会史など、文学に関連する個別な社会領域を対象とする方向と、他方でそれらの領域からなる文学活動の全体を一つの社会的なネットワークあるいはシステムとして捉え、様々な社会的関連性の中でその文学システムが歴史的にどのように変化・発展してきたのかを考察するという方向がある。しかし、どちらの方向においても従来の作者と作

品の文学史とは異なった観点から、幅広く文学という活動の歴史的な位置付けを行なうという試みがなされてきた。こういった文学研究の傾向が生じた歴史の具体的な背景等については、近年になって相次いで刊行されているドイツ文学研究の歴史に関する種々の著作に譲るとして(*3)、ここで重要なのは、しかしながら「十九世紀の後半に初めてドイツ作家の全国団体が成立した」という歴史的現象が、これらの社会的関係性に視点を定めた文学・文学史研究おいても、考察の対象として（その重要性に比して）現在までほとんど注目されてこなかった、という事実である(*4)。

もちろん、作家の職業団体についての研究は皆無ではない。文学研究の分野では、1970年から80年にかけて、各個別の団体の歴史に限定した記述や、また作家の職業団体を通史的に取り上げた研究もあった(*5)。これらは現在でも歴史的な資料の典拠として非常に有用であるし、新たに調査をはじめる際の手掛りとなる実に貴重な存在ではある。しかしこれら少数の研究は、実際には1969年の統一団体ＶＳ »Verband deutscher Schriftsteller in der Industriegewerkschaft Medien« 結成に端を発した職業団体（というよりもほとんど労働組合であるが）に対するごく一時的な関心の高まりの中で行われたものであり、よってそこには、近代ドイツの市民社会の関係性の中で作家が占めていた位置を確認するような視点も、また「作家と作家を作家たらしめている諸要因との関係を分析する」(*6)ような視点も存在しなかった。そして至極当然のことであるが、1980年代以降のＶＳの衰退と並行して、作家の職業団体への関心自体も薄れていくことになったのである（蛇足ながら付け加えておくと、社会学の分野でも、種々の利益団体あるいは労働組合等の研究の一環として、自由業の一つと位置付けられた作家の職業団体に関する歴史統計学的な資料の分析などが、ごく僅かながら行われた。ただしこれは1960年代のことである）。

こういった状況が含意しているのは、作家の職業団体ひいては作家それ自体に関する歴史的な視点に立った研究が、社会史的な文学研究の領域においてさえ、なぜか立ち遅れた状態にあるという現実である。その原因として考えられるのは、従来まであまり注目されてこなかった匿名的な社会領域（読者・出版・市場や、また全体としての文学システムなど）を扱うことを特に意識して選択されたと思われるような、社会学的な視点の取り方である。つまり、きわめて「個」的であると同時に集団的でもあり、また自己認識の仕方からしてすでにその両極の間で不断に変動するように見える作家・作家団体といった対象を、作家のメンタリティなどに関する歴史的な手掛りもなしに捉えようとすること自体が、上記のような視点ではそもそも困難であったのかもしれない、ということである(*7)。そこでこの偏った状況を克服するために、さらに新たな別の視点が必要となってくるのであるが、それが二つめの理由と深く結びついている。

その二つめの理由とは、歴史学における社会史研究の動向を視野に入れているということである。1970年代以降、ドイツの社会史研究は国家・政治・戦争・外交といった旧来の対象から少しずつ解放され、まず経済的な領域の歴史へ、さらに教育や技術の社会史、そして宗教や病気から青少年、労働者、家族形態の変遷や年金生活者の歴史など、社会のさまざまな領域へと視野を拡げてきた。80年代以降は、さらにフランスを中心として行われていた文化や人間のメンタリティについての歴史研究(*8)とも融和し、人間と社会をより総合的に捉

えるための歴史学の理論や方法に関して、活発な議論が行われるようになっている(*9)。こういった中でも特に注目すべきは、上述の「文学の社会史研究」などとほぼ同時進行で行なわれてきた、近代ドイツの教養市民層およびこれによって形成されたドイツの市民社会に関する、数多くの研究である(*10)。「教養市民」とは大学教育によって教養を身に付け、人格を陶冶した人間のことを意味する歴史学上の用語であり、彼らによって形成されていたとされる社会階層が教養市民層である。これらは現在のところドイツ社会史研究における研究対象の一つの中核をなしており、そこでは「教養市民」という歴史的な集合概念を前提として、ドイツ市民社会における主導的階層の行動や文化に関する規範的価値観が形成あるいは再生産されてきたプロセスを捉えるための、新たな視点が提示されているのである。

もちろん、これまでの教養市民に関する諸々の研究の中でも、やはり作家は中心的な対象ではなかったし、むしろほとんど言及されてこなかったというべきかもしれない。しかしそれは別としても、作家となった人間たちを多数輩出してきた主要な社会層と見なされている教養市民層と、これを取り巻いていた当時の社会状況との関係についてより多くの情報を得ることにより、「文学の社会史」の分野では不明瞭なままであった作家の存在についても、新しい側面を見い出すことを十分に期待できると思われるのである。また作家の存在を歴史的視点から捉えることができれば、これが逆に従来の教養市民研究の欠落部分を埋めることにもなると思われるのである。

■ 4．作家と教養市民の関係

しかしながら、近代市民社会、教養市民層、あるいはその規範的価値観といったカテゴリーに照準を合わせ、これらを基本的な構成要因として作家の存在を捉える、というような単純な還元主義的図式がここで通用するかというと、実はそういうわけにはいかない。なぜならば、非常に厄介なことには、そもそも「教養市民的」と見なされるような人物の在り方それ自体が、少なくとも部分的には「作家」の手によって作り上げられてきたものであるかもしれないことが、近年になって歴史・文学双方の社会史研究者たちにより指摘されはじめているからである(*11)。最も極端な場合を考えるならば、これは、作家や詩人たちがその著作の中に書き記して残した、権威的・啓蒙的であるような社会層を形成する「教養市民」とその市民社会が、実は物語や演劇や小説の中だけの、文学の世界の中だけの虚構の存在であって、現実の世界にはそのような教養市民などという社会層は「存在しなかった」のかもしれない、ということを意味している。そして、虚構の存在を提示しているさまざまな文学メディアの存在に影響された挙げ句に「教養市民」という概念に囚われてしまった歴史学者たちが、「実際には存在しなかったもの」を「歴史的な実在」として捏造してしまったのかもしれない、という事態をも暗示しているのである。

そこで、このような指摘をとりあえず作業仮説として受け入れるとすると、作家が描いた（歴史資料による精確な裏付けを得ることができないような）文学の中の教養市民、その教養市民像と社会の中での自身の現実との間の落差を認識していた（一つの社会層と呼ぶには、その個々の存在の間の差異があまりにも大きすぎた）人間たち、そういった人間たちの中から生まれてきた作家、さらにその作家が描いた云々・・・という自己認識のサイクルを

通じて次第にアイデンティティが形成されていく動的な関係の構図が、ここに浮かび上がってくる。よって、たとえ上記のように極端な立場をとらないとしても、作家は教養市民という社会層の人物・価値観・行動規範やその文化性に依存していたのだ、というような還元的関係づけの視点からは、とりあえず離れておかねばならなくなるのである。その代わりに「教養市民」と「作家」との間に想定できるのは:

[1] 作家が教養市民的な人物像を作り出し、文学を通じてその啓蒙的・権威的な社会層としての理念・価値観の実現や規範化の促進を行なっていた(*12)、

また、結局のところ従来の文学と歴史の研究においては、少なくとも十九世紀の末頃まで作家も教養市民層の一員であったと想定されてきた(*13)ことを考慮すると、

[2] 作家によって創出された教養市民という社会層の理念が、逆に作家自身の存在を規定する形で機能するようになっていた、

という二つの状態からなる相互規定的な関係である。もしミクロのレベルで観察を行なうのならば、これら二つの状態は、先に述べたような一つの循環プロセスを構成する不分離な単位と見なさねばならないであろう(*14)。しかもそこでは「作家」という集合についてではなく、特定個人の心理的な状態変化を逐一追跡していくような視点が必要となる。ところがこれとは逆に、十分に長い時間の経過を考慮に入れた歴史的な現象として（すなわちマクロのレベルで）このプロセスを観察しようとするときには、まず、各々の状態に対して異なった対象規定の仕方と観察方法が必要となる。さらに、それぞれの時代に特有の様相を追求するために、二つの状態の進展度あるいは消失度を比較する視点が必要となる。なぜならば、プロセスを全体として捉えた場合、状態[1]は必ず状態[2]よりも先行して発生（およびおそらくは消滅）していなくてはならず、逆は決してありえないからである。もっとも現在の時点で可能なのは、状態[1]だけが存在した時代、状態[1]と[2]がともに存在した時代、そしてこのプロセスの最終局面として、状態[1]が存在しなくなった後に状態[2]が単独で存在した時代、という大まかな区分だけである。しかし、マクロの視点をとる観察者にとっては、これでも十分に有効である。

状態[1]を把握するためには、諸々の文学テクストの中で扱われているどのようなテーマや人物が教養市民的であるかを考えるよりも、まず最初に文学テクストの生産(書く)、出版・販売、消費(買う、あるいは読む)、などといった活動からなる文学システムの成立と発展について、歴史的に調査することが必要となる。とりわけ「本を読む」という行為がどのような種類の（これまで総和的な存在と見なされてきた）社会層において習慣化し、定着することになったのか、その歴史的なプロセスと合わせて究明せねばならない。またその際には、テクスト内部に描写されている読書行為との関係を探る、という視点からもこれを行なわねばならないであろう(*15)。なぜならば、従来まで教養市民層を形成すると見なされてきた「官吏、顧問官、判事、弁護士、牧師、医師、教授、教員、作家、ジャーナリスト、芸術家、技術者」

等々に共通する要素は「大学教育」そのものではなく、歴史研究のうえでは、むしろ第一が本を読むことに基づいた教養であり、第二が教養に基づいたその職業の専門性であると考えられてきたからである。規制や検閲などによる外部からの操作と関わりながら、作家と文学がいかにしてその他の教養市民的な規範や人物の形成に関与してきたのか、どのような要素が（そしてテクストが、作家たちが）結果として選択されることになったのかは、このような調査の完了した後に、初めて明らかになるはずである。

一方、これよりもさらに歴史的に進展した段階としての状態[2]を把握するためには、作家のアイデンティティおよび集団としてのメンタリティ形成のプロセスを、歴史的に構成された教養市民的理念との関連においてと同時に、読書を習慣化した社会層（仮にこう呼ぶことにするが）の同時代における実際の存在様態との関連において観察することが必要となる。すなわち、作家たちが自己の存在を規定しようとしたときに基準としたものを、通時的および共時的に追求する観点が必要となるのである。前者に関して留意すべきことの一つは、理念としての教養市民の中でも、特に「作家のイメージ」が作家の自己形成プロセスに最も強く関与していたであろう、ということである。例えば、ロマン派の詩人たちに関して成立している詩人のイメージは、実際のロマン派詩人たちの存在様態とは一致しないものであったにもかかわらず(*16)、後の世代にあたる十九世紀後半以降の作家・詩人（およびこれを志望した人間）にとっては、詩人的存在の一つの明確な基準として機能していたことなどが挙げられるだろう。さらにこれと関係してもう一つ注意しなくてはならないのは、その「作家像」と現実の作家との間の明らかな非相同性である(*17)。つまり、作家が作家の理念として抱いていたものと、作家の現実の様態とを、観察者は決して取り違えてはならないということである。これは教養市民概念のはらんでいた問題と同じことである。また当の作家がこの非相同性に対してどのような姿勢で望んでいたのかということも、やはり明らかにする必要があるだろう。共時的な観点から特に注目すべきなのは、作家以外の「読書を習慣化した社会層」の依拠していた自己規定の方法と基準とが、作家のそれらとどのように関わり合っていたのかということである。

さて、ここで振り返って考えてみると、初めに第２章において示した本考察の中心課題は、歴史的に必ず先行して存在したはずの状態[1]を前提とすることによって、状態[2]を上記のような観点から究明していくことであったといえる(*18)。なにゆえに「作家」というテーマが学究的な関心を呼び起こすのか、その理由については、すでに明らかであろう。またこの問題設定の利点を考えてみると、それはなんといっても、ドイツ文学・歴史双方の社会史研究において見逃されてきた重要なテーマの存在を明確に示せることであり、しかも同時に、これと取り組むために必要な柔軟な視点をも提示できるということにある。つまり、まず第一には、教養市民という歴史的概念を無効化するような、あるいは作家の存在をそれへと一方的に還元するような視点を排除しつつ、教養市民と作家の動的な関係を新しい側面から把握できるということであり、第二には、それぞれの時代に特有の自己認識と自己形成の在り方を、それぞれの時代に特有の社会的関係性の中で追求できる、ということなのである(*19)。

もちろん、このように歴史的な前後関係を考察の前提とする観点では、「結局のところ作

家(と文学)はどこからやってきたのか？」という根源的な問題に対しては、有意な解答を提示することができない。しかしすでに述べたように、そういった問題はそもそもこの考察の範囲外なのである。よってここでは、「作家と文学の発生」(*20)はこれら以前の問題として扱われるべき性質のものと想定している、とだけ述べておくことにして、次章では十九世紀後半のドイツにおける「教養市民と作家」の関係を、上記の観点から簡単にたどってみることにする。

■ 5．知的職業とリアリズム

まず最初に明らかにしておかなくてはならないのは、十九世紀後半のドイツが上述したプロセス中のいずれの局面に相当する時代であったのかということであろう。どのような基準にしたがって判断を下したのか、という点については後に説明するとして、結論から先にいっておくと、この時代はプロセス最後の状態[2]だけが存続していた局面にあたっている。つまり、作家自身はもはや「実在しないような教養市民層の人物や市民社会」を描かなくなっており、逆にそれまでに形成されていた教養市民層の理念と、読書を通じてこれを取り込んできた社会層の存在が、作家の自己認識の仕方を左右するようになっていたと推測される時代である。

さて、十九世紀後半は文学史上ではリアリズムの時代と位置付けられている。特に1880年代以前のドイツ文学のそれは「市民的リアリズム」などと呼ばれているが(*21)、文学のリアリズムについては、理想主義・啓蒙主義あるいはロマン派などに対立して、現実をありのままに描こうとする姿勢や方法をとる文学的な傾向を意味する、というのが一般的な理解となっている。ところが、このリアリズム文学の傾向を「教養市民と作家」の関係から捉え直してみると、これまでの理論や主義の問題とは異なった別の側面がそこに現われてくるのである。この時代の作家は、理念としての教養市民像の代わりに（リアリズムの定義によれば）実在するような人物像を描くようになっていたわけであるが、この状況は、作家の描く人物像が現実の人間の在り方に接近した、という事態だけでなく、逆に現実の人間の在り方が作家の描き出してきた人物像に近づいた、という事態をも同時に「可能性としては」含意しているのである(*22)。芸術・美学や哲学の領域で展開されてきた高度に抽象的なリアリズム問題を棚上げにしたうえに、このように中途半端な観点を提起しようとする姿勢に対しては、おそらくさまざまな反論がなされることであろう。しかしながら、ドイツの先進的な社会史研究者たちの指摘にしたがって、市民社会と作家・文学との間に見られる二重螺旋のように絡み合った関係を十分に検討するならば、実際のところ後者の可能性を完全に否定することは不可能であるように思われるのである。またこれが従来の文学研究において見逃されてきた視点であり、時代と社会に特有な文学の様相を捉えるために必要な相対的な視点なのではないか、とも思われるのである。この意味で考えると、読書を習慣化した社会層を描く「市民的リアリズム」とは、まさに絶妙の命名であったということができるであろう(*22a)。

また文学の領域とは別に、新聞や定期刊行誌などのジャーナリズムの領域においても、リアリズム出現の契機と教養市民のつながりを観察することができる。ジャーナリズムの世

界では、紙上に掲載されていた文学作品や批評などの他にも、十九世紀の半ばまで、作家の役割が支配的であった。つまり、それまでの通信員や新聞記者の仕事とは、新しい出来事についての資料を集めることだけではなく、むしろその資料を自身の手で、まさに作家の仕事のように脚色することであった。そういった作家の手になる通信文は、情報源としてよりも、主として政治についての「市民的」な見解を社会に広めたり、また特に「読書を習慣化した社会層」の世界観や文化的要求を公共の場において提示したりすることに貢献していたのである。そして、十九世紀前半のジャーナリズムにおける作家のこの役割に決定的な変化をもたらしたのは、ドイツでは1849年以降に始まった電信の実用化と商業化であった(*23)。多くの新聞雑誌が競合するジャーナリズムの領域では、（他紙よりも）新しい情報が持つ内容とその価値とが、古くなった情報に基づいて作家が練り上げた文章を次第に紙上から締め出すようになり、逆にジャーナリズムにおいて培われた描出の技法が、文学の世界において活かされていくことになったと考えられるのである。この変化はドイツにおいて 1870年代以降に急速に進展し、純粋な時事通信・情報伝達を目的とする新聞類が出現した1880年代に、電信に加えてさらに写真技術が実用化されるなどの技術革新をへて、決定的なものとなったのである(*24)。

1880年代以降になると、自然主義の作家たちが今度は労働者や職人など下層階級の現実を描写対象とするようになっていくのだが、この時点で、作家が理念的な教養市民像を描かなくなっていたことは明らかである。ジャーナリズムの領域においても、そのための場はすでに提供されなくなっていた。また、この時代の作家が教養市民的な人物を描いたとしても、それはもはや理念的な存在としてではなく、現実に一つの社会層を形成する実在としてであった。

一方、主に十八世紀から十九世紀半ばころまで文学の中でその存在を示されてきた「教養市民」とは、教養を前提とする知的職業にともなった高い社会的地位を占めるような、一種の権威的な人物たちからなる社会層であったわけだが、1850年代以降に始まったのは、まさにこの権威的人物像と社会階級のドイツ全体における実体化であった。読書を通じてこの理念を取り込み、長らく自己の上に投影し続けてきた種々の社会集団が、現実の世界においても同等の社会的地位を占めることを明確な形で要求しはじめ(*25)、またついに実現もしはじめていたのである(*26)。

この目的のために実際に促進されたのは、客観的に計測可能な基準を設定し、これにしたがって教養市民的存在を規定できるような、一種の規格化のプロセスであった(*27)。まず知的業績の裏付けが、普遍的で人格陶冶を証明するような、したがって非常に曖昧でもあるような（例えば人文主義的な意味での）教養によってではなく(*28)、真の高学歴証明(学位)、好成績での試験合格(資格)、長期訓練の修了(技術)といった具体的な基準にしたがって行われるようになった。また職業に従事することを認可する最終的な資格と権威とが、次第に国家によって付与されるようになっていった。さらに、この規格化プロセスは厳密で排他的な方向に向けて推進されると同時に、その地位にふさわしい高い所得水準を確立するような方向へも進められていった。十九世紀の後半には「ドイツ諸邦国の多くが専門職にかかわる諸条件の重大な改革を行った。医師、法律家、さらには教師でさえそうだが、多くの専

門職内部において存在していた養成方法、資格、社会的地位、報酬における相違は、目に見えて小さくなっていった」(*29)のである。この知的職業の規格化と、それにともなう教養市民という理念の実体化、および一つの主導的な社会階層であるという自己認識、これらを大いに促進することになったのは、各領邦国家において職種ごとに組織されていた職業団体の存在であり、また統一ドイツ帝国の成立後には、全ドイツ的組織として結成されることになった各種職業連盟の存在であった。

こういった状況を逆の意味で捉えるならば、教養市民という概念とこれに基づく市民社会とは、やはり十九世紀半ばにいたるまで、ドイツにおいてはそれに相当する歴史的な実体を持つに到ってはいなかったのだ、と主張するための根拠が十分にあるといえるであろう。また十九世紀の後半以降になって、この規格化プロセスの原点である教養市民の理念を産出してきた「過去の作家」たちが、ドイツの国民的象徴として祝祭されるようになったことに関しても(*30)、統一ドイツ帝国の成立というこの時代の政治的な要因が大きかったとはいえ、それまでの作家と教養市民の関係から見ても、必然的な結果であったといえるであろう。

■ 6．規格外市民としての「作家」

十九世紀後半のドイツの作家が、組織化し、要求を掲げ、教養市民の理念にふさわしい地位と身分を徹底して追求していく、というこの権威志向的プロセスを実際にたどっていくことになったのは、他のいくつかの知的職業においてその目標がほとんど達成されかかっていた時期、すなわち1870年代から80年代にかけてのことである。このドイツ帝国の成立期は、古典作家の記念碑や文学館などが創設され、文学史上でも過去の作家がドイツの文化的象徴として掲げられることになった時代であった。また作家が「職業」として成立するために必要となる技術的・法律的・経済的その他さまざまな条件もすでに整っており、よって作家にとっては他の知的職業以上に自身の地位向上を期待できたはずの時代であった。このような時代状況を背景とするならば、ドイツ初の全国的作家連盟 »Allgemeiner Deutscher Schriftsteller-Verband« が結成され(*31)、また作家たちが市民社会の中でのその地位の確保、国家による作家という職業の承認、文学のための公的機関の設置、文学教育のための制度確立などを声高に要求したという事実も、まったく自然の成り行きとして受け止めることができるであろう。ところが、前回の拙論においても示したとおり、他のほとんどの教養市民的職業の場合とは異なって、作家は最終的に知的・専門的な職業としての規格化を果たすことに失敗したのである(*32)。

第４章で示したような「教養市民と作家」の絡み合った関係が決定的に消滅したのは、間違いなくこのときのことである。そして、大部分の教養市民が選択した規格化への道から外れたときに、他の教養市民的存在に対する作家の関係、およびその市民社会の内部における立場は、かつてないほどの大きな変化を被ることになったのである。医師や弁護士や技術者などの閉鎖的な世界とは異なって、ドイツの「作家」は開放された「場」として、それまで以上に誰もが自由に足を踏み入れ、また出ていくことが許されるような「場」として確立されてしまった。そして、国家のような超個人的権威によって承認される排他的境界条件を設定で

きなかったために、他の領域において、特に他の教養市民的職業の世界において排除されることになった人間たちが、大量に流入してくる「場」となってしまった(*33)。普遍的な意味での教養や、客観的に測定できるような知的業績・職業資格といった基準の通用しない一角が、教養市民の世界の中に成立してしまったのである。このように混沌とした場の中にあって、他の教養市民と対等の権威や地位を現実の世界において獲得するために必要であった、統一的なアイデンティティの形成という条件は、当時の作家にとって、すでに実現不可能なほど困難な事柄となっていたのである。

最初の全ドイツ作家連盟がその組織としての機能を停止した時点で、他の教養市民が同質の構成員からなる排他的社会集団の形成をほぼ終了していたという状況下において、作家だけが、このように異質な存在となっていた。この観点から捉えるならば、市民社会の規範を逸脱するという規範にしたがって行動するボヘミアンやアウトサイダーと呼ばれる種類の人間たちが、十九世紀末頃になって（正確には十九世紀のドイツ作家連盟が機能を停止したその直後に）「作家」の中に出現しはじめたことを、もはや単なる歴史的な偶然とは見なせなくなるであろう(*34)。また、このとき作家がとうとう同時代の作家自身をテーマとしはじめ、しかも尋常な市民ではない存在として描きはじめたことも、偶然の出来事とは考えられなくなるのである(*35)。さらに述べておくならば、これは、従来まで作家の職業性を考察する際に頻繁に持ち出されてきたような図式だけでは、つまり、芸術・文学活動の高尚な自律性という理念と文芸市場やマスメディアへの他律的な依存関係（およびこれによる地位の没落）という現実の間のジレンマ(*36)、といった二項対立的な図式だけでは、およそ説明不可能な状態である。むしろ、そのような図式にとらわれてしまうと、この時代にだけ存在していた「国家による職業制度の確立を望む」という作家たちの声の意味を正確に理解するどころか、そういった主張がなされていたという歴史的事実そのものを認識することさえ困難となるかもしれない。最初の作家連盟が結成された時代における作家の自己認識と自己規定の在り方は、当時の作家たちによって、美学的価値観と経済的価値観の間の不一致などのような狭い問題の枠を越えたところで、近代ドイツの社会全体を巻き込むような構造変動の内部において、生きた人間としての彼ら自身の存在意義を左右するような選択淘汰と生存競争に関わる問題として、議論されていたのである(*37)。

作家の職業団体が組織され、分裂して、融合して、そして機能を喪失するという結果にいたった1880年代前後のわずか10年あまりの間に、それでは、実際にどのようなプロセスを経てドイツの作家はこのような変貌を遂げることになったのか、その歴史のブラック・ボックスの中では、いったいどのような事態が進行していたのであろうか。祝祭される「偉大な古典作家」の理念や教養市民的人物の理念に相対して、またようやく確立しつつあったドイツの教養市民社会の中にあって、作家（あるいは作家になろうとする者）は自己をどのような存在と認識していたのであろうか。そもそも、作家はこのときその社会の中で「どのような作家」でありえたのであろうか。これらは文学研究においても歴史研究においてもあまり重視されてこなかった問題である。しかし、これらは断固として解明すべき重大な問題のはずである。そして「作家連盟の研究」が目指しているのは、この作家の問題を究明することである。

■ 注釈

(*1) この問いは、「あなたがやっているのは文学の研究ではないんですよね？」という否定的な形で書き直すことが可能である。そこで特に含意されていると思われるのはおそらく文学と社会の関係を考えようとする際にいつも現われるはずの「文学のテクストをどうするのか？」という問題である。本論では、この問題についてもまた一つの解答の可能性が提示される。 Vgl. Bürger, Peter: Institution Literatur und Modernisierungsprozeß. -In: Ders.[Hg.]: Zum Funktionswandel der Literatur. Suhrkamp, Frankfurt a.M. 1983, 9-32, 引用は p.30: »(...) aus der Funktionsäquivalenz der Institutionen darf nicht gefolgert werden, daß die Kunst in der bürgerlichen Gesellschaft >nichts anderes< als Religionsersatz sei. Diese Schlußfolgerung wäre deshalb problematisch, weil sie voraussetzt, daß die Werke total von der Institution bestimmt seien. Dies ist aber nicht der Fall; vielmehr lebt die Kunst in der bürgerlichen Gesellschaft von der Spannung zwischen Institution und Einzelwerk.« なお本論の以下の各章においては、P.Bürger が考察の前提としたこの「市民社会」について、十八世紀から十九世紀におけるその発生過程そのものが文学と作家という観点から根本的に問い直されることになる。また注釈(*18)参照。

(*1a) 本論は、筆者が昨年度の研究報告として発表した論文を前提としている。Vgl. 前原真吾: 近代ドイツの作家連盟(1). 十九世紀ドイツ帝国におけるその成立の社会的背景. -In: 独語独文学科研究年報 第23号, 北海道大学ドイツ語学・文学研究会, 1996, 35-54

(*2) »Schriftsteller« の含意は、日本的な意味での「作家」ではなく、むしろ広く「文筆家」と呼ぶべきものである。よって本来ならば「作家連盟」ではなく「文筆家連盟」とすべきなのであるが、医師連盟、技術者連盟など他の職業団体との名称のバランスを考慮すると、筆者には「作家連盟」の方が語感的にも適当であるように思われた。よって、とりあえず呼称の変更はしない。

(*3) Hermand, Jost: Geschichte der Germanistik, Rowohlt, Hamburg 1994,などで詳しく説明されている（特に、p.173-193）。

(*4) この一、二年の間に状況がいくらか変化しているようである。昨年、ドイツ帝国からワイマール時代の文学活動全般についてきわめて詳細な調査と分析を行なった、特筆すべき社会史研究の大著が公刊された: Scheideler, Britta: Zwischen Beruf und Berufung. Zur Sozialgeschichte der deutschen Schriftsteller von 1880 bis 1933. -In: Archiv für Geschichte des Buchwesens, Hrsg.v.der historischen Commission des Börsenvereins der Deutschen Buchhändler, Buchhändler-Vereinigung GmbH, Frankfurt a.M. 1997, Bd.46.
また次のような資料集等が出版されているという事実から、作家の職業団体に関する種々の歴史的資料の編纂も始められているのではないかと推測できる:
Brückmann, Ariane: Journalistische Berufsorganisationen in Deutschland: Von den Anfängen bis zur Gründung des Reichsverbandes der Deutschen

Presse, Böhlau, Wien;Köln;Weimar 1997.

(*5) 1970年代以降に公刊された十九世紀の作家団体に関する研究は、筆者の調査した限り以下の３点だけである:

Stegers, Wolfgang: Der Leipziger Literatenverein von 1840. Die erste deutsche berufsständische Schriftstellerorganisation. -In: Archiv für Geschichte des Buchwesens Bd.19, Frankfurt a.M. 1978, 225-364.

Balzer, Rudolf Wilhelm: Aus den Anfängen Schriftstellerischer Interessenverbände. Joseph Kürschner, Autor - Funktionär - Verleger. -In: Archiv für Geschichte des Buchwesens Bd.16, Frankfurt a.M. 1976, 1457-1648.

Kron, Friedhelm: Schriftsteller und Schriftstellerverbände. Schriftstellerberuf und Interessenpolitik 1842-1973, Metzler, Stuttgart 1976.

二十世紀以降の諸団体に関する著作はやはり70年代のものが若干存在するが、ここでは対象外なので明記はしない。

(*6) 石原次郎 / 名執基樹 他: 経験的文学研究の現状と課題 －札幌圏における実態調査の報告－. -In: 独語独文学科研究年報 第23号, 北海道大学ドイツ語学・文学研究会, 1996, 73-91、引用箇所はp.73。

(*7) もちろん作家とは何をする存在であるのか、その仕事に際してどのような人間たちと交流をするか、どのくらい稼ぐのか、等々についての社会学的研究は、いくつか行われている。例えば: Engelsing, R.: Arbeit, Zeit und Werk im literarischen Beruf, Vandenhoeck&Ruprecht, Göttingen 1976、あるいは: Funk,H./ Wittmann, R.G.: Literatur-Hauptstadt. Schriftsteller in Berlin heute, Berlin 1983 などがある。しかしここで問題になっているのは十九世紀後半ドイツの社会における「作家」であって現代の作家ではない。少なくとも後者であれば、種々の社会学的な調査方法を用いてその存在を捉えることもできるが、過去の人間たちに対しては間違いなく別のアプローチ方法が必要となる。文芸市場についての統計資料や出版人との関係の記録、時代のベストセラー一覧などが無効であるというのではない。だが作家のメンタリティのようなものを追求するには、特に近代ドイツの場合、むしろ大学等の教育制度、情報伝達や交通手段など技術の発展状態、社会全体の機能分化と差異化の進展、これらに対する心理的反作用等々について考えてみる方がはるかに有効であろうと思われるのだ。

(*8) Vgl. Dinzelbacher, Peter: Zur Theorie und Praxis der Mentalitätsgeschichte, -In: Ders.[Hrsg.]: Europäische Mentalitätsgeschichte, Kröner, Stuttgart 1993, XV-XXXVII.

(*9) 個々の著作のほか、1975年以来刊行されている次の雑誌において社会史研究の詳しい動向をたどることができる: Geschichte und Gesellschaft. Zeitschrift für Historische Sozialwissenschaft, Vandenhoeck&Ruprecht,Göttingen 1975-.

(*10) Vgl. Konze, W./ Kocka, J./ Koselleck, R./ Lepsius, M.R. [Hg.]: Bildungsbürgertum im 19.Jahrhundert. 4Bde., Stuttgart 1985-1990.

Engelhardt, Ulrich: »Bildungsbürgertum« Begriffs- und Dogmengeschichte

eines Etiketts, Klett-Cotta, Stuttgart 1986 などは、教養市民概念を批判的に検討している。ドイツの社会史研究においてはたんに Bürgertum とだけ表記した場合、おおむねこの Bildungsbürgertum と同じ内容を指す。これは主導的な中産階級の意であって、決して単なる都市住人や現代的な意味での中間階層のことではない。→(*12)

(*11) ここではもっとも過激な立場を表明している研究者の言葉を引用しておく:
Eibl, Karl: Literaturgeschichte, Ideengeschichte, Gesellschaftsgeschichte - und »Das Warum der Entwicklung«. -In: Internationales Archiv für Sozial geschichte der deutschen Literatur(IASL) Bd.21, Niemeyer, Tübingen 1996, 1-26。引用は p.15-16: »>Das Bürgertum< des 18.Jahrhunderts (...) war primär eine in Dramen, Romanen und Zeitschriften verbreitete literarische Fiktion. Aber es war eine sehr wichtige Fiktion, ein entscheidender Beitrag zur Lösung eines vitalen gesellschaftlichen Problems, ja, des fundamentalen Problems von Vergesellschaftung überhaupt. Im literarischen Medium wurde das homogene Selbstbild einer unter dem Gesichtspunkt der Sozialdaten äußerst inhomogenen Gesellschaft entworfen, deren dynamische und eloquente Mitglieder nichts gemeinsam hatten als ein Problem - eben das Problem dieser Inhomogenität. Das hat die Literaturwissenschaftler (...) lange Zeit in die Irre geführt, weil sie intuitiv den an Homogenisierung interessierten Selbstentwurf für das Abbild eines homogenen Standes hielten. Überdies war die Literaturgeschichte, ja die Geschichtsschreibung überhaupt, selbst in das integrative Interesse involviert, den >Bürger< zu erfinden. Erst allmählich (...) zeigt sich, daß hinter den literarischen Bürger nur ein sehr schemenhaftes und inkonsistentes reales Korrelat stand. Auch das Bürgertum des 19.Jahrhunderts ist (...) ein Produkt der Literatur. Mehr und mehr erweist sich die Konstruktion auch dieses Bürgertums auf der Grundlage von harten Sozialdaten als Chimäre.«

(*12) 作家が自らの手で教養市民という社会層の原型を創造したのか、それともどこか別の時代あるいは別の社会に最初のモデルとなる存在があったのか、おそらく多くの場合にはギリシアが想定されていたと思われるが、明らかではない。またこの種の市民がいつ頃から文学の世界に登場するようになったのかも、本来ならば追求されてしかるべき問題である。しかし啓蒙主義・新人文主義時代の文学と、当時の教養市民層に相当する人物たちが獲得可能であったはずの知識・技術・報酬・社会的地位の実情などを照らし合わせてみれば、ここでの問題点はより明確化するはずである。「教養市民」なるものを一つのまとまった社会階層と捉えることの困難さは、想像に難くない。Vgl. Brunner, O./ Conze, W./ Koselleck, R.[Hg.]: Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland. Klett-Cotta, 1992, Bd.1: »Bildung«,508-551; »Bürger«,672-725

(*13) 作家が教養市民であったのか、それとも教養市民（例えば医師や顧問官など）が作家の機能をも同時に果たしていたために、歴史学的に作家が教養市民の範疇に加えられてきたのかは判然としない。それぞれに異なった作家の側面を取り上げている次のような著作を対比するとなおさらである: Haferkorn, Hans Jürgen: Der freie Schriftsteller. Eine literatur-soziologische Studie über seine Entstehung und Lage in Deutschland zwischen 1750-1800. -In: Archiv für Geschichte des Buchwesens Bd.5, Frankfurt a.M. 1964, 523-712.
Ziolkowski, Theodore: Das Amt der Poeten. Die deutsche Romantik und ihre Institutionen. dtv4631, München 1994.

(*14) この関係は、間接的な自己認識に基づいた一種独特な自己／他者形成のプロセスと捉えることができる。

(*15) こういった観点にとって有効であろうと思われる研究が、経験的文学研究の分野においていくつか実践されている。 Vgl. Schmidt, Siegfried J.: Die Selbstorganisation des Sozialsystems Literatur im 18.Jahrhundert, Suhrkamp, Frankfurt a.M. 1989.
Viehoff, Reinhold: Selbstbezügliches Handeln? -In: Schmidt, Siegfried J. [Hg.]: Literaturwissenschaft und Systemtheorie. Positionen, Kontroversen, Perspektiven, Westdeutscher Verlag, Opladen 1993, 194-240.

(*16) Vgl. Ziolkowski→(*13) および Schumann, Andreas: Nation und Literaturgeschichte. Romantik-Rezeption im deutschen Kaiserreich zwischen Utopie und Apologie, Iudicium Verlag, München 1991.

(*17) Vgl. Eibl, 1996 →(*11)

(*18) 社会と文学の関係をこのような形で追求していくことによって、「文学テクストの存在」をも部分的に視野に取り込むことが可能となる。また文学テクストを手掛りとして社会的な実体を導き出すという可能性と、各々の時代における社会の潜在的な意味を明確な形をとった観念の形態へと作り上げていく可能性とを、同時に検証することが可能となる。

(*19) よって、考察の対象はもはやテクスト概念をめぐる文学研究の方法では扱いきれない領域に存在する。だがテクスト／ディスクール解釈にのみ基づいてこの自己／他者形成プロセスの歴史的・社会的様相を記述しようという試みもある。例えばアメリカのシェークスピア研究者 Stephen Greenblatt は次のように述べている:
»Sie(=Selbstbildung) überschreitet unweigerlich die Grenzen zwischen der Erschaffung literarischer Charaktere, der Gestaltung der eigenen Identität, der Erfahrung, von Kräften geformt zu werden, die sich der eigenen Kontrolle entziehen, und dem Versuch, das Selbst eines andern zu bilden. (...) unsere Interpretation hätte die Aufgabe, etwas mehr Gespür und Verständnis für die Konsequenzen dieser Tatsache zu entwickeln, indem sie sowohl die gesellschaftliche Präsenz des literarischen Textes in der Welt als auch die gesellschaftliche Präsenz der Welt im literarischen

Text untersucht.« Aus: Greenblatt, S.: Selbstbildung in der Renaissance. Von More bis Shakespeare(Einleitung). -In: Baßler, M. [Hg.u.Übers.]: New Historicism, Fischer, Frankfurt a.M. 1995, 35-47. 引用は p.38、p.40。
Greenblatt は文化人類学の記述方法を西欧史の解釈にも応用してみるべきだ、つまり、文学も含めたすべてのテクストを歴史の資料として同じ次元で扱うべきだという見解であって、これは部分的にはメンタリティ史研究の観点とも通じるところがある。しかし個別の作用と社会的なプロセスとを区別しないこのようなテクスト研究の在り方が、結局は「教養市民層の社会」という歴史的幻影の産出に貢献してきたのではないのだろうか。

(*20) 実は、文学の成立から始めておおよそ状態[1]の発生にいたるまでをいくつかの歴史的事例をもとに分析している興味深い研究も存在する:
Eibl, Karl: Die Entstehung der Poesie, Insel, Frankfurt a.M. 1995.

(*21) ある文学事典でこのリアリズムは次のように定義されている: »sog. >poetischer R.<(...) oder >bürgerl.R.<(...), im engeren dt. Sinne (...) die Zeit rd. 1850-90 umfassend; gekennzeichnet durch bewußte Wendung zur weltoffenen Wirklichkeitsdarstellung(...); in Abkehr von der idealisierenden, wesenhaft darstellenden Kunst der Klassik, dem phantasievollen Subjektivismus und der weltfernen Schwärmerei der Romantik (...).« Aus: Wilpert, Gero v.: Sachwörterbuch der Literatur, Kröner, Stuttgart 1989, 743.

(*22) この可能性を明確な形で検証するためには、まず、文学作品の中に描かれているさまざまな市民像を歴史的に比較してその変化を示していくと同時に、また他方で、実際のドイツ社会の中に「一つの社会層である」という共通の認識をともなった教養市民層が出現してきた過程を、文学作品の影響を受けていない厳密な資料によって描き出し、両者を比較することが必要である。しかしながら、実際の検証をおこなう前に、社会と文学の関係を考えるための新たな視点を提示するという意味において、この場でこの可能性の存在を示しておくことは、決して無駄ではないだろう。

(*22a) この名称は文学史家 Fritz Martini による。もちろん、ここでは彼が提示した本来の意味で用いているわけではない。「都市市民の」というのが本来である。
Vgl. Martini, Fritz: Deutsche Literatur im bürgerlichen Realismus 1848-1898. 2.durchgesehene Aufl., J.B.Metzler, Stuttgart 1962.

(*23) Vgl. Kolkenbrock-Netz, Jutta: Fabrikation - Experiment - Schöpfung. Strategien ästhetischer Legitimation im Naturalismus, Carl Winter, Heidelberg 1981. 特に S.72-75。電信技術の発明自体は十九世紀初頭である。

(*24) 伊藤俊太郎 他編: 科学技術史事典, 弘文堂, 1994, p.443 によると、ガラス乾板による写真機の実用化が1878年、現在のようなロールフィルムが実際に販売されるようになったのは1888年である。ジャーナリズムの世界と文学作品の世界を明確に区別することなく活動できたのは、おそらくTh.Fontaneあたりが最後の世代であったと思われる。

(*25) 十九世紀後半になってこの傾向が顕在化し始めたことについては、さまざまな原因

を想定することができる。しかし文学との関連で見た場合、筆者の考えでは、この時代にいたるまで、テクストの中で提示されてきた諸々の「理念」がドイツ全体を覆うような公共的性格を持つに到ってはいなかったこと、より一般的にいえば、世論形成のための社会的メカニズムが、例えばフランスなどと比較してほとんど確立していなかったことが、もっとも主要な要因である。注釈(*26)参照。Vgl. Chartier, Roger: Die kulturellen Ursprünge der Französischen Revolution, Campus, Frankfurt a.M.;New York 1995 (Aus dem Französischen von Klaus Jöken)

(*26) 単なる地域的な試みだけならすでに十九世紀初頭より幾度か行われてきた。しかしそれらは保守的領邦諸政府による弾圧や、移動交通や情報伝達の手段、出版技術などが未発達であったことなどから大規模なネットワーク化、全国的な運動の組織化を果たせず、ことごとく失敗に終わっている。もちろんその他にも、そもそも当時では職業として成立するための基盤が不備であった、などの理由も考えられる。科学・医学上の重要な発見、近代的法制度の確立、技術革新あるいは社会の必要に相応する教育制度の実現などはすべて十九世紀半ば以降のことである。Vgl.McClelland, C.E.（マクレランド，チャールズ・E.）：近代ドイツの専門職，晃洋出版，1993
望田幸男[Hg.]：近代ドイツ=「資格社会」の制度と機能，名古屋大学出版会，1995
Cocks, Geoffrey/ Jarausch, Konrad H.[Hg.]: German Professions 1800-1950, Oxford University Press, New York;Oxford 1990.
Conze, W. / Kocka, J.[Hg.]: Bildungsbürgertum im 19.Jahrhundert. Teil I. Bildungssystem und Professionalisierung in internationalen Vergleichen.
→(*10)

(*27) この規格化のプロセスは、封建的身分制の崩壊にともなって生じてきたと見なしうるが、機能的には上級の社会層にその権威と地位の承認を与えるという身分制度の役割を引き継ぐものであり、結果として社会の流動性を抑制する方向で働くことを期待されていたとも思われる。

(*28) 従来の意味の教養は、大学へ進むためのアビトゥア合格という形でやはり具体化されたが、当然のことながらその知的業績としての価値は相対的に引き下げられた。

(*29) McClelland, p.23

(*30) Vgl. Noltenius, R.: Dichterfeiern in Deutschland. Rezeptionsgeschichte als Sozialgeschichte am Beispiel der Schiller- und Freiligrath-Feiern, Wilhelm Fink, München 1984. なお同書では古典作家 Schiller と十九世紀の同時代作家 Freiligrath の祭典を「文学の公的受容の形態」という観点から同列において扱っているが、本論のような観点から見た場合、これは疑問な点が多い。

(*31) この最初の作家連盟の設立声明を公示したのが、世紀転換期の文学活動を扱った著作（例えば→(*37)）において自然主義ボヘミアン作家の筆頭に記されることの多いHart兄弟であったことについて、注意を喚起しておきたい。その設立声明に署名をしたのは、1870年代のドイツ文学の世界で著名な存在であったと考えられている Friedrich Bodenstedt、Hermann Lingg、Julius Grosse、 Friedrich Spielhagen の四人であった。Vgl. Kolkenbrock-Netz, p.130

(*32) 前原 p.45-48。

(*33) Vgl. Kürschner, Joseph: Vorwort. -In: Ders.[Hg.]: Deutscer Litteraturkalender 1893, 15.Jg., Eisenach 1893, 5-8, 引用は p.5: »Auf dem Gebiete der litterarischen Arbeit regelt sich Angebot und Nachfrage nicht. Ersteres überwiegt Letztere, die >litterarische Reservearmee< wächst von Jahr zu Jahr. Auch der neue Jahrgang des vorliegenden Kalenders ist dafür ein Beweis.« このBeweisとは、毎年増大していく一方のドイツ作家の名簿のページ数のことである。

(*34) 作家たちの経済状況が悪化した理由の一つとして現段階で想定できるのは、ジャーナリズムの領域における「作家的活動」の需要が激減したことである。しかしそれと作家のアウトサイダー意識とを結び付けることは困難であろう。

(*35) Vgl. Wolf, Eva: Der Schriftsteller im Querschnitt: Außenseiter der Gesellschaft um 1900? Ein systematischer Vergleich von Prosatexten, Minerva-Publikation, München 1978.

(*36) Vgl. Bäumer, Rolf: Autor. -In: Borchmeyer, D./ Zmegac, V.[Hg.]: Moderne Literatur in Grundbegriffen, Athenäum, Frankfurt a.M. 1987, 29-37

(*37) 作家のアイデンティティ問題を扱った研究には、中でも特に1900年前後の文学活動を取り上げようとする著作には、どれもこれも、常にこの二項対立的図式がともなっている。しかし、作家と教養市民社会の問題がこの図式に還元され得ないことはまったく明らかである。この図式の欠陥は、例えば、非常に広い視野をもって作家の職業の問題を取り上げ、また作家たちによって「国家の介在」を求める主張が行われた、という歴史に注目している次のような著作においてさえ、十九世紀の全ドイツ作家連盟については言及されていない、といった事実からすぐに明らかになるであろう。そのような状況の背後に間違いなく存在すると思われるのは、「作家連盟とは契約や報酬、著作権等に関わるトラブルを解決し、作家の経済的利益を保護するための組織である」といった一元的な規定であり、またこの作家連盟の「本来そうであるべき役割」を追求しなかったような組織は考察に値しない、という考え方である。最も新しいドイツの作家連盟であるＶＳ（この組織は作家のストライキを目標に掲げた）を作家連盟の理念型として想定し、これに基づいて過去の歴史を規定しようとすると、このような結果に到るのであろう。

Vgl.Berman, R.A.: Literarische Öffentlichkeit. -In: Trommler, Frank[Hg.]: Deutsche Literatur, Jahrhundertwende: Vom Naturalismus zum Expressionismus(1880-1918), Rowohlt, 1980, 69-85

（大学院博士課程 ／ 日本学術振興会 特別研究員）